

共通試験制度における大学・学部の 層別化と選抜機能の評価

大学入試センター研究開発部試験基盤設計研究部門 鈴木規夫

本研究では、共通試験制度下における大学志願者の進学行動を明らかにするため、始めに、大学・学部の「層別化」の構造について調べた。層別化は「輪切り現象」とも呼ばれており、大学・学部志願する集団が、偏差値といった単一の学力指標によって、スライスされたレモンのように薄い層に区切られる（輪切りにされる）ことを意味する。

共通1次試験当時、自己採点は、受験生に対して共通1次試験のおおよその位置を確認するための手段として利用させるものであったが、実際には「受験産業が介入し、また、高等学校の偏差値中心的な進路指導の増大とも相まって、受験生が『合格可能な大学』に割り振られる」手段として利用されていた。このため、自己採点に基づいた狭い範囲での大学選択が行われ、その結果、大学・学部の層別化が一層進んだといわれている。

その後、センター試験に変更され、「輪切り」は緩和されたと考えられているが、その点についての実証的な研

究は行われていない。本研究は、この点を明らかにするため、級内分散（MSW）や級間分散（MSB）を過去数十年に渡って計算し、それらの指標の時系列的推移を調べた。

次に、選抜機能を評価するため、自己採点結果による「自己選抜」と試験による「試験選抜」の2段階における選抜機能について調べた。自己選抜は自己採点によって志望する大学・学部を決定する段階での選抜である。一般に選抜といえば、志願（応募）してきた集団（入力）を対象とするが、選抜にはその選抜への参加を絞り込む自己選抜が必ず存在する。選抜前の絞り込みが、選抜に参加する者の特性に大きな影響を与えることを考えると、自己選抜がどのように行われているかを調べることは選抜のあり方を考える上で重要な視点である。

試験選抜は実際の個別試験による選抜である。自己採点による自己選抜の後、志望した大学ではそれぞれ個別試験による選抜が実施される。これが一般的な「選抜」と呼ばれている段階で

ある。この選抜を通して、合格者が決定される。実際の個別試験がどのような選抜基準として機能しているかを知ることが、制度を評価する上で重要と考える。

本研究では、この二つの選抜機能に焦点を当て、それぞれの段階での選抜がどのような機能を果たしているかを実証的に調べた。第1の大学・学部層別化の分析が入力（志願者）と出力（合格者）の特性を評価しようとしているのに対し、第2の選抜機能の分析は入力と出力を連結する選抜の機能そのものを評価しようとするものである。

分析の結果から得られた主な知見は以下のとおりである。

(大学・学部層別化)

(1) 受験機会の複数化の実施前後によって、学部間構造で大きな違いがあることが分かった。学部間構造を「層別」「拡散」「狭層別」「同一」の四つのパターンに分類し、構造の特徴化を図ったが、このパターンでいうならば、共通1次試験制度下の受験機会の複数化以前では「層別」と「拡散」が繰り返され、受験機会の複数化以降では「狭層別」と「同一」が繰り返された。「層別」と「拡散」はいずれも学部間格差の拡大を意味するものであるのに対し、「狭層別」と「同一」がいずれ

も学部間拡散の縮小を意味することを考えると、センター試験によって「層別化」現象の緩和が果たされたことが裏付けられた。

(2) 学部間構造の違いを前期日程と後期日程で比較してみると、両者とも年度間推移に伴う変化量は微小であり、似た構造にあることが分かった。その中で、学部間格差は後期よりも前期の方が大きく表れる傾向にあることも分かった。前期日程に比べ後期日程では小論文や面接等学力試験以外の選抜資料を利用していることが反映したものと推測される。

(選抜機能)

(1) 自己選抜機能

大学志願者は共通試験受験後自己採点結果に基づいて志望大学を選定することになるが、そこでは低得点者による志願断念を決意させる自己選抜行動がとられ、志願者数の増加に歯止めをかける装置として機能していることが明らかとなった。その自己選抜行動は、前期日程より後期日程の方で厳しく行われており、低得点者層は、前期日程に比べ後期日程への志願を断念する傾向が高いことも確認できた。

(2) 試験選抜機能

共通1次試験発足当時、国公立大学の大学入試では「大学教育を受けるにふさわしい能力・適性等を備えた

者」を判定することを目標として、学力を基準とした選抜が行われてきた。この成果は、総合的な学力上位者あるいは文系あるいは理系教科に優れたメリハリのきいた学力特性をもった者をより多く合格させる形で現れていた。

その後、学部定員を分割して選抜を実施する「分離・分割方式」による選抜試験が実施されるようになり、共通

試験による選抜機能が低下し、特に「総合強」が合格者として多数選抜されなくなってきた。このような変化は、「選抜評価の多元化」がもたらした結果として捉えることができよう。今後は、少子化と相まって、学力以外の選抜が増え続けければ、試験選抜機能はさらに変化していくことが予測される。

